

課題の選択が知的障害児の課題従事行動に及ぼす効果： 課題に対する好みのレベルからの検討

村中智彦*・藤原義博**

(平成17年10月31日受付；平成17年11月29日受理)

要 旨

本研究では、知的障害児2名の課題学習において、好みの高い課題と好みの低い課題の従事事態を設定し、対象児が課題を選択する条件で課題従事行動が高まるか否かを検討した。課題にはテレビ番組の視聴を用い、聞き取りと観察によって番組に対する好みを査定した。交替操作型デザインを適用し、対象児が番組を①選択できない条件、②選択できる条件、③選択できないが好みの番組に従事する条件を実施し、課題従事行動を比較した。その結果、好みの高い課題事態では、①、②、③の条件で課題従事行動に差は認められなかった。また、好みの低い課題事態では、1名の対象児において、②選択できる条件で課題従事行動が高まる傾向を一部認めたが、両対象児ともに、選択条件よりも、課題に対する好みが課題従事行動に強く影響したことを示唆した。

KEY WORDS

choice-making 選択

preference 好み

task engagement behavior 課題従事行動

intellectual disabilities 知的障害

I. 問 題

知的障害児の選択決定 (choice-making, 以下、「選択」) (Guess, Benson, & Siegel, 1985 ; 望月・野崎, 2001) をテーマにした研究は、ノーマライゼーションの理念にもとづく個人の自律や尊厳といった権利擁護を根幹に展開されている (Bannerman, Sheldon, Sherman, & Harchik, 1990 ; Kerney, Durand, & Mindell, 1995)。近年では、このような理念を超えて、知的障害児の選択のもたらす実証的な効果や具体的な支援のあり方が問われている (Bambara & Koger, 1996 ; Lancioni, O'Reilly, & Emeson, 1996 ; 村中, 2002 ; 村中・藤原, 2005 ; Sigafoos, 1998)。そして、知的障害児の課題学習において、子どもが課題を選択できる条件 (以下、「選択条件」) では、選択できない条件 (以下、「非選択条件」) に比べて、課題従事行動や学習の正反応率は高まることが報告されている (Cosden, Gannon, & Haring, 1995 ; Dattilo & Rusch, 1985 ; Dunlap, dePerczel, Clarke, Wilson, Wright, White, & Gomez, 1994 ; Moes, 1998 ;

* 附属障害児教育実践センター

** 障害児教育講座

村中・藤原・小林, 2001)。しかし、一方で、課題従事行動や正反応率は高まらないという否定的な結果も示されている (Cole, Davenport, Bambara, & Ager, 1997; Dyer, Dunlap, & Winterling, 1990; 村中・藤原, 2003)。これらの結果を踏まえて、最近の研究では、選択条件で課題従事行動が高まる効果の要因が検討されるようになった。そして、課題に対する好みと選択行為それ自体の要因が示唆されており、現在も議論が続けられている。

課題に対する好みの要因を主張する立場では、子どもは課題を選択することで、用意された複数の課題の中から最も好みの高い課題に従事でき、このことが課題従事行動を高めるという説明がなされる (Lerman, Iwata, Rainville, Adeline, Crosland, & Kogen, 1997; Parsons, Reid, Reynolds, & Bumgarner, 1990)。事実、好みの高い課題では課題従事行動が高まることが示されている (Koegel, Dyer, & Bell, 1987; Morrison & Rosales-Ruiz, 1997)。この説明が妥当ならば、指導者が対象児の好みの高い課題を確実に同定し、その課題を選択肢に含んだ選択機会を設けることで対象児の課題従事行動を高めることができる。

選択行為それ自体の要因を主張する立場では、子どもが課題の選択を行うこと自体が、課題に対する好みの要因を越えて、課題従事行動を高めるという説明がなされる (Dunlap ら, 1994; Moes, 1998; 村中・藤原・小林, 2001)。この要因を最初に確かめたのは Dunlap ら (1994) であった。彼らは、選択条件で認められた課題従事行動の増加と逸脱行動の低減の要因 (課題に対する好み、選択行為それ自体) を調べるために、Yoked-No-Choice 条件 (以下、「YNC 条件」という実験手続きを使用した。この YNC 条件は、先行する選択条件で対象児が選択した課題を、後続する非選択条件で対象児に従事させる手続きであった。YNC 条件では、対象児は選択できないが好みの課題に従事できることが仮定された。実験の結果、YNC 条件では、選択条件に比べて、課題従事行動の生起レベルは著しく減少し、逸脱行動の生起レベルは著しく増加した。この結果より、課題に対する好みではなく、対象児が課題を選択した行為それ自体が課題従事行動の増加と逸脱行動の低減を導いたと結論づけた。この説明が妥当ならば、指導者が選択機会を設けること自体が対象児の課題従事行動を高めることに作用するであろう。

Lerman ら (1997) は、Dunlap らとは異なる結果を示唆している。彼らは、対象児が2つの好みの高い物品の中から1つを選択できる選択条件と YNC 条件では、課題従事行動に差はないことを示した。Lerman らの実験手続きでは、Dunlap らと異なる点があった。Lerman らは、実験に先だって、対象児の好みの高い物品を同定し、その好みの高い物品を選択条件の選択肢として使用していた。Dunlap らは、選択肢とした課題について、事前に対象児の好みを同定する手続きを実施していない。Lerman らの知見より、対象児にとって好みの高いものに従事する条件では、選択・非選択条件に関係なく、好みの高いものに従事できることから、課題従事行動の生起レベルが両条件で天井効果を示したのではないかと考えられる。それでは、Dunlap らの選択行為それ自体の要因が課題従事行動を高める効果は、どのような選択条件で生じるのであろうか。

Vaughn and Horner (1997) は、好みの高い課題に従事する事態 (以下、「HP 課題事態」と好みの低い課題に従事する事態 (以下、「LP 課題事態」という2つの事態を設け、それぞれの事態ごとに、選択・非選択条件を実施し、問題行動の生起レベルを比較した。その結果、HP 課題事態では、選択・非選択条件にかかわらず、問題行動の生起レベルは低かった。一方、LP 課題事態では、選択条件で非選択条件よりも問題行動の生起レベルが低減することを明らかにした。LP 課題事態では、選択・非選択条件に関係なく、対象児は好みの低い課題に従事

しなければならない。仮に、問題行動の生起レベルが課題に対する好みの要因のみに規定されるのであれば、選択・非選択条件で問題行動の差は生じなかったであろう。つまり、LP課題事態の選択条件で問題行動が低減したのは、選択行為それ自体の要因が作用したのではないかと考えられる。しかし、Vaughn and Hornerの研究では、YNC条件が適用されなかったために、LP課題事態の選択条件で問題行動が低減した要因が課題に対する好みであったのか、選択行為それ自体であったのかは明らかでない。また、Vaughn and Hornerの研究では、LP課題事態の選択条件で問題行動が低減した結果、対象児の課題従事行動が高まったか否かの評価が行われていない。LP課題事態の選択条件において、選択行為それ自体の要因が課題従事行動を高めるか否かを検討するためには、DunlapらやLermanらのように、課題従事行動を従属変数とし、YNC条件を適用してみる必要がある。

そこで、本研究では、知的障害児2名の課題学習において、HP課題事態とLP課題事態の2つの事態を設け、それぞれの事態で非選択・選択・YNC条件を実施し、課題従事行動を比較した。本研究の目的は、①HP課題事態では、非選択・選択・YNC条件で課題従事行動に差はないであろう、②LP課題事態では、選択行為それ自体の要因が作用して、選択条件で非選択・YNC条件よりも課題従事行動は高まるであろう、という2つの仮説を検証することである。

II. 方法

1. 対象児

後述する3. 好みの査定(2) 観察の手続きが実施可能であったS1, S2を対象とした。

1) S1: 自閉的傾向を伴う知的障害と診断された5歳11ヶ月(実験開始時)の男児。身近な物や好みの動物の名前はよく理解していた。動物の絵カードを提示して「なあに」と名称を訪ねると、「ボウ(象)」「ウマ(馬)」などの多くの発語が認められたが、日常の食物などの要求時には、相手の手を持って連れて行くことがほとんどであった。服を着る、靴を履くなどの日常生活動作はほぼ自立していた。津守式乳幼児精神発達質問紙の結果(CA 5:11)、運動4:0、探索1:9、社会1:9、生活3:0、言語1:3であった。

2) S2: 知的障害と診断された6歳0ヶ月の男児。指さしなどの動作指示の理解も難しい。自発的発声はあるが、要求などの伝達手段として使用されることはなかった。要求は不明確で、対象物を見る、近づくなどがほとんどで、頻度も少なかった。服を着るなどの動作では、手を支えての援助が必要であった。排尿も自立していなかった。津守式乳幼児精神発達質問紙の結果(CA 6:0)、運動3:0、探索1:6、社会0:8、生活1:6、言語0:1であった。

2. 実験課題

予備実験では、Dunlapら(1994)の絵本の読み聞かせを試みたが、両対象児の課題従事行動はほとんど認められなかった。それと類似し、対象児の日課のレパートリーとしてあった子ども向けテレビ番組(以下、「番組」)の視聴を実験課題とした。番組は、対象児の生活年齢相応で近年放送されたものとした。

3. 好みの査定

実験に使用する好みの高い番組（以下、「HP 番組」）と好みの低い番組（以下、「LP 番組」）を3つずつ決定するために、母親への聞き取りと観察を実施した。

1) 母親への聞き取り: 母親を対象に、「非常に好きである」「どちらでもない」「嫌い・見ない」の3件法を用いて、事前に抽出した25番組の好みを評定してもらった。「非常に好きである」と評定されたものをHP 番組とし、「嫌い・見ない」と評定されたものをLP 番組とした。S 1のHP 番組は4つ、LP 番組は9つ、またS 2のHP 番組は6つ、LP 番組は6つであった。

2) 観察: 母親への聞き取りによるHP 及びLP 番組を、対象児に実際に視聴させて観察し、好みを確かめた。

(1) 期間: 平成12年6月初旬～9月中旬であった。

(2) 設定: J 大学障害児教育実践センター検査室で実施した。検査室には、番組を視聴する装置を置いた。装置のモニターには市販のカラーテレビ21型を使用し、それにVHSビデオデッキを接続し、それらをテレビ台に設置した。その正面に約1m離して、対象児と着席して視聴するための机と椅子を置いた。対象児の椅子から約1m離れた場所に実験者用の椅子を置いた。部屋の隅に、記録用の8ミリビデオカメラと記録者1名を配置した。

(3) 査定セッション: 週1回の指導（約1時間30分）で、2回の個別指導（約30分間で知覚・認知やコミュニケーションの学習をねらいとした指導者との1対1の指導）をはさんで、前、中、後の計3回の査定セッション（約10分）を行った。

(4) 刺激: HP 及びLP 番組の内容の主要な部分を編集したVHSビデオテープ（以下、「テープ」）を作成した。番組によって、テープの再生時間は異なり、最短で4分30秒、最長で10分49秒であった。テープは市販のケースに入れ、ケースには番組内容を表すキャラクターの写真や絵を貼り付けた。

(5) 手続き: 対象児と実験者は検査室に入り、机を挟んで対座し、「はじめます」の挨拶を行った。直後に、実験者はテレビ台に置いた1つのテープを提示し、「○○（番組名）を見ましょう」と言って手渡した。対象児にケースからテープを取り出させ、VHSデッキに入れ再生ボタンを押させてから着席させて番組を視聴させた。番組の再生中に対象児が離席した場合は、離席後15秒ごとに、言語指示（「席について下さい」）、言語指示+動作指示（席を指さす）、マニュアルガイダンス（手を持って席につかせる）の段階的指示を行った。すべてのセッションをビデオ録画した。

なお、両対象児とも、HP 番組とLP 番組を視聴するセッションをランダムに配置した。S 1ではHP 番組とLP 番組を合わせた計13番組、S 2ではHP 番組とLP 番組を合わせた計12番組のすべての番組について、1番組につき計3セッションを実施した。

(6) 標的行動: モニターへの注視行動を標的とした。モニターへの注視行動とは、モニター画面に視線が向く行動とした。

(7) 結果の処理: ビデオ録画にもとづいて、以下の2つを分析した。

①注視率: Dunlap ら（1994）と同じ手続きで、10秒間インターバルレコーディング法（Barlow & Hersen, 1984）を使用し、インターバルの70%以上（10秒間インターバルの計7秒以上）でモニターへの注視行動が生じた場合に当該行動が生じたとして記録した。インターバルの開始は対象児が着席したときとし、番組が終わったときを終了とした。セッション毎に、当該行動が生じたインターバルの割合（以下、「注視率」）を次の式によって算出した。注視率

(%) = モニターへの注視行動が生じたインターバル数 / 総インターバル数 × 100

②逸脱率：インターバルにおいてモニターへの注視行動の逸脱（モニター画面以外に視線が向く行動）が、1回でも生じた際に、逸脱が生じたと記録した。①注視率と同様に、モニター注視行動の逸脱が生じたインターバルの割合（以下、「逸脱率」）を算出した。

(8)結果：各番組における注視率と逸脱率の平均値と番組間の相対的な比較より、対象児ごとに基準を定めてHP及びLP番組を選定した。

S1のHP・LP番組の結果をFig. 1に、S2の結果をFig. 2に示した。

Fig. 1のように、S1では、ノンタン、トミカ、トムとジェリー（以下、「トム」）をHP番組とした。注視率の平均は90%以上で、逸脱率の平均は30%以下であった。ドラえもん、サザエさん、ものまねをLP番組とした。注視率の平均は55%以下で、逸脱率の平均は70%以上であった。

Fig. 2のように、S2では、ノンタン、アンパンマン（以下、「アンパン」）、ソングをHP番組とした。注視率の平均は90%以上で逸脱率の平均は45%以下であった。ものまね、うさぎ、サザエさんをLP番組とした。注視率の平均は45%以下で逸脱率の平均は80%以上であった。

4. 実験

1) 期間：好みの査定を終了後、平成12年9月中旬～13年3月中旬であった。

2) 手続き：場所と設定は、好みの査定（観察）と同じ。HP課題事態、LP課題事態の事態ごとに、非選択条件（No-Choice条件、以下、「NC条件」）、選択条件（Choice条件、以下、「C条件」）、YNC条件のいずれかを適用するセッションを実施した。

①NC条件（対象児が番組を選べない条件）：実験者は、3つのテープを約5cm離して机上に並べて置き、「○○（番組名）をみます」と言って、1つを任意に選んで対象児に手渡した。なお、3つのテープの提示位置（左・中央・右）はセッションごとにランダムに配置した。その他の手続きは好みの査定（観察）と同じであった。

②C条件（対象児が番組を選べる条件）：実験者は、3つのテープを机上に並べて置き、「どれをみますか。1つを取って下さい」と言った。その後5秒以内に、対象児が1つのテープを取るか、触る反応を認めたときに、「○○ですね。」と言ってテープを手渡した。その他はNC条件と同じであった。

③YNC条件（対象児は番組を選べないが好みの番組に従事できる条件）：実験者は、先行したC条件で対象児が取ったか、触った番組を手渡した。その他はNC条件と同じであった。

3) 標的行動：好みの査定（観察）と同じであった。

4) デザイン：交替操作型デザイン（岩本・川俣, 1990）を適用した。本デザインにもとづき、3つのフェイズで実験を構成した。3つのフェイズを通じて、実験者が事前に取り決めたCセッション、YNCセッションの順にセッションを実施した。フェイズ1（ベースライン）では、Cセッション、YNCセッションともにNC条件を実施した。フェイズ2では、CセッションでC条件、YNCセッションでYNC条件を実施した。フェイズ3では、Cセッション、YNCセッションともにC条件を実施した。本デザインのフェイズ3では、フェイズ2で標的行動に有効であった条件をC・YNCセッションに導入することが適切であるが、本実験ではC条件で課題従事行動が高まるという仮説のもとにC条件を導入した。

仮説どおりであれば、HP課題事態では、注視率は、フェイズ1～3を通じて、Cセッション、

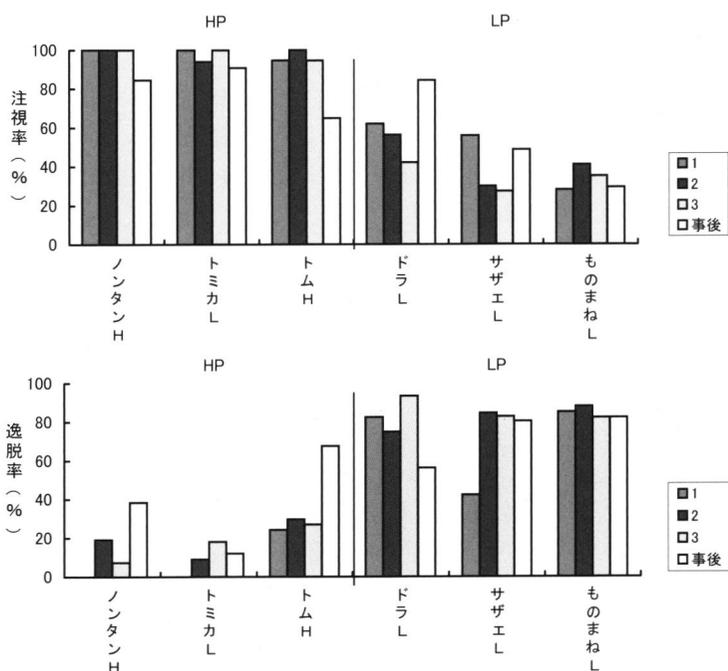


Fig. 1 S 1・番組の好み査定結果

* グラフ中の番組名に記したH,Lは母親に対する聞き取りのHP及びLP番組の結果を示している。

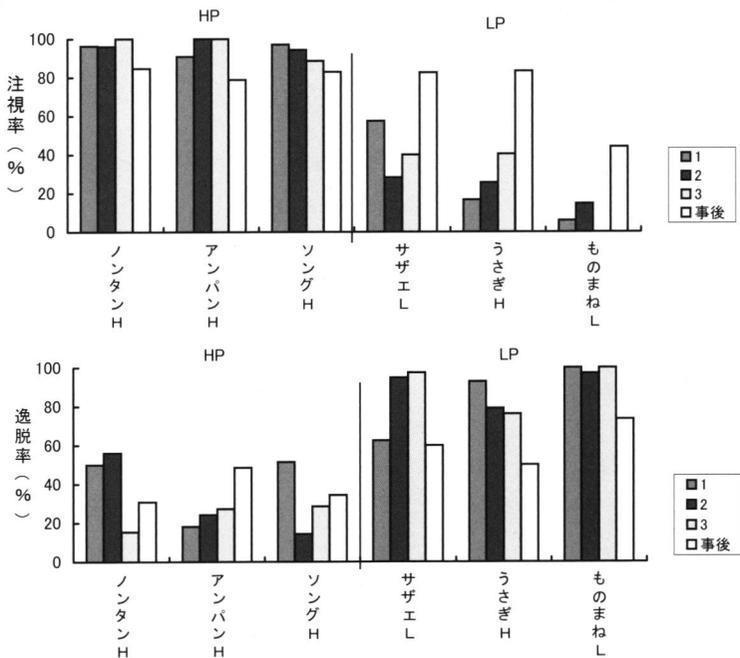


Fig. 2 S 2・番組の好み査定結果

* グラフ中の番組名に記したH,Lは母親に対する聞き取りのHP及びLP番組の結果を示している。

YNCセッションともに高いレベルで安定し、逸脱率は低いレベルで安定する。LP課題事態では、注視率は、フェイズ2のCセッションにおいて、フェイズ1よりも高くなり、逸脱率は低くなる。かつ、フェイズ2では、Cセッションの注視率は、YNCセッションに比べて高くなり、Cセッションの逸脱率はYNCセッションよりも低くなる。フェイズ3では、Cセッション、YNCセッションの注視率と逸脱率は同じレベルになり、そのレベルはフェイズ2のCセッションと同じになる。

5) セッション：3. 好みの査定と同様に、1回の指導で計3セッションを実施した。HP課題事態を行うセッションとLP課題事態を行うセッションをランダムに配置した。

6) 好みの事後査定：実験終了後、好みの事後査定を実施した。手続きは実験前の好みの査定（観察）と同じであったが、1番組につき1セッションの実施であった。

7) 結果の処理：好みの査定（観察）と同じであった。

8) 信頼性の査定：全セッションの1/5を対象に、2名の観察者が独立して記録を行った。対象としたセッションは、実験期間を通じて均等に配置した。次の式によって観察者間の一致率を算出した。一致率(%) = 2名の観察者の記録が一致したインターバル数/総インターバル数×100

査定の結果、S1における一致率の平均は、注視率で94.7% (range: 86.5~100%)、逸脱率で95.5% (range: 88.5~100%)であった。S2は、注視率で94.5% (range: 85.0~100%)、逸脱率で94.7% (range: 85~100%)であった。

Ⅲ. 結果

1. HP課題事態の結果

S1のHP課題事態の結果をFig. 3, S2の結果をFig. 4に示した。以下に、対象児ごとに結果を述べる。

1) S1: Fig. 3の上のグラフより、注視率はCセッション、YNCセッションともに、フェイズ1~3を通じて高いレベルであったが、セッションごとに見ると、フェイズ2のセッション6, 9, 12の注視率はYNCセッションで低かった。また、フェイズ3のYNCセッションでは下降傾向が認められた。

Fig. 3の下のグラフより、逸脱率はCセッション、YNCセッションともに、フェイズ1~3を通じて変動しているが、全体で見ると低いレベルであった。各セッションの逸脱率を見ると、フェイズ2のYNCセッション6, 9, 10, 12では高く、フェイズ3のYNCセッションでは上昇傾向であった。

また、注視率と逸脱率は視聴した番組内容に左右される傾向が認められた。例えば、Fig. 3に示した番組aのノンタンの注視率はフェイズ1~3を通じて80%以上で番組cのトムやbのトミカよりも高く、逸脱率はcやbよりも低かった。

2) S2: Fig. 4の上のグラフより、注視率はCセッション、YNCセッションともに、フェイズ1~3を通じて高いレベルで安定した。また、Fig. 4の下のグラフより、逸脱率は、フェイズ2とフェイズ3のCセッションでデータの変動が認められたが、全体的に見ると、Cセッション、YNCセッションともに、フェイズ1~3を通じて低いレベルであった。

2. LP 課題事態の結果

LP 課題事態の結果を Fig. 4, S 2の結果を Fig. 5に示した。

1) S 1 : Fig. 5の上のグラフより、注視率、逸脱率ともにフェイズ間の差異が認められた。注視率は、フェイズ1では、Cセッション、YNCセッションともに低いレベルであった。しかし、フェイズ2では、Cセッションにおいて、フェイズ1よりも高いレベルであった。そして、フェイズ2のセッション8, 11において、Cセッションの注視率はYNCセッションよりも高かった。フェイズ3では、Cセッションの注視率はセッション13, 16で低く、YNCセッションの注視率はフェイズ2と同じレベルであった。番組aのドラえもんの注視率は、他の番組に比べて高かった。

Fig. 5の下のグラフより、逸脱率はフェイズ1では、Cセッション、YNCセッションともに高いレベルであった。フェイズ2では、Cセッションにおいて、フェイズ1よりも低いレベルであった。フェイズ3では、Cセッション、YNCセッションともにフェイズ2よりも高いレベルであった。

2) S 2 : Fig. 6より、注視率、逸脱率ともに、フェイズ間の差異は認められなかった。

Fig. 6の上のグラフより、注視率は、フェイズ1のCセッションで上昇傾向にあり、YNCセッションで低いレベルであった。フェイズ2では、セッション10を除いて、Cセッション、YNCセッションともに注視率は低かった。フェイズ3では、Cセッション、YNCセッションとも、注視率のレベルはフェイズ2よりも高かった。bのうさぎを視聴したセッションでは、注視率は高かった。

Fig. 6の下のグラフより、逸脱率は、フェイズ1において、Cセッションで下降傾向にあり、YNCセッションで高いレベルで安定した。フェイズ2では、セッション10を除いて、Cセッション、YNCセッションともに逸脱率は高いレベルであった。フェイズ3では、Cセッションの逸脱率は、フェイズ2と同じレベルであり、YNCセッションの逸脱率のレベルは、フェイズ2よりも低かった。

3. 選択結果と注視率及び逸脱率との関連

1) S 1 : HP 番組, LP 番組ともに、C 条件はフェイズ2で7回、フェイズ3で8回、計15回実施された。全てのC条件で、3つのテープの提示後5秒以内に、1つのテープを取る、触る反応が認められた。HP 番組では、ノントン7回、トムは5回、トミカは3回選ばれた。LP 番組では、ドラえもんは8回、サザエさんは4回、ものまねは3回選ばれた。ノントン、トム、サザエさん、ドラえもんでは、右、中央、左の全ての提示位置で1回以上選ばれていた。

選択結果と注視率及び逸脱率との関連を見ると、最も多く選択されたHP番組のノントンやLP番組のドラえもんの注視率は高く、逸脱率は低かった。

2) S 2 : HP 番組, LP 番組ともに、C 条件はフェイズ2で6回、フェイズ3で8回、計14回実施された。全てのC条件で、3つのテープの提示後5秒以内に1つのテープを取る、触る反応が認められた。HP 番組では、アンパンは7回、ソングは5回、ノントンは2回選ばれた。LP 番組では、ものまねは7回、サザエさんは4回、うさぎは3回選ばれた。提示位置との関連を見ると、HP 番組では左が5回、中央が9回、右が0回、LP 番組では左が4回、中央が9回、右が1回であり、中央と左の番組を取るか、触るという位置による偏向が認められた。

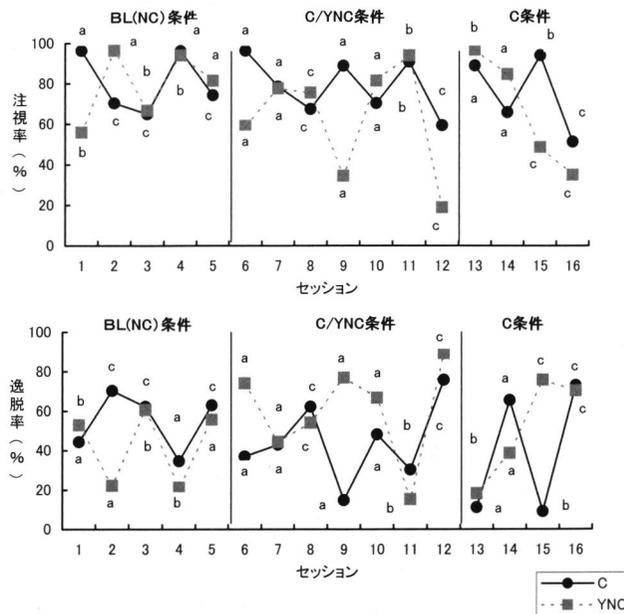


Fig. 3 S1・HP番組の注視率と逸脱率

* aはノンタン, bはトミカ, Cはトムの番組内容を示した。
 *注視率の結果を上, 逸脱率の結果を下に示した。

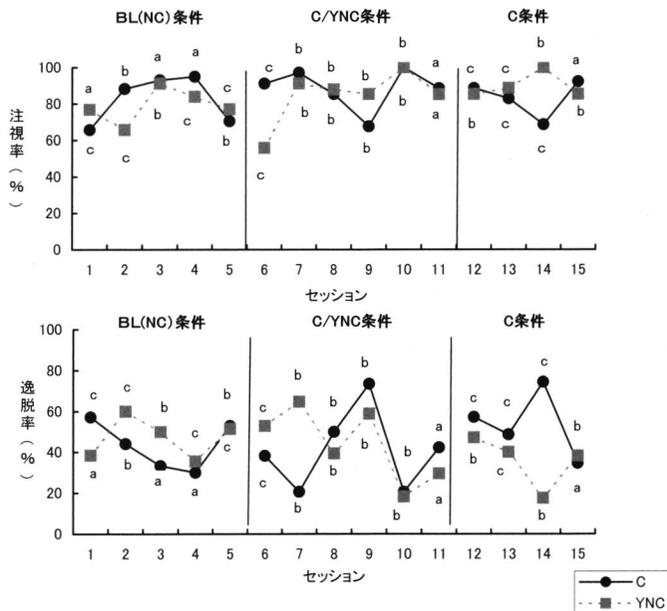


Fig. 4 S2・HP番組の注視率・逸脱率

* aはノンタン, bはアンパン, Cはソングの番組内容を示した。
 *注視率の結果を上, 逸脱率の結果を下に示した。

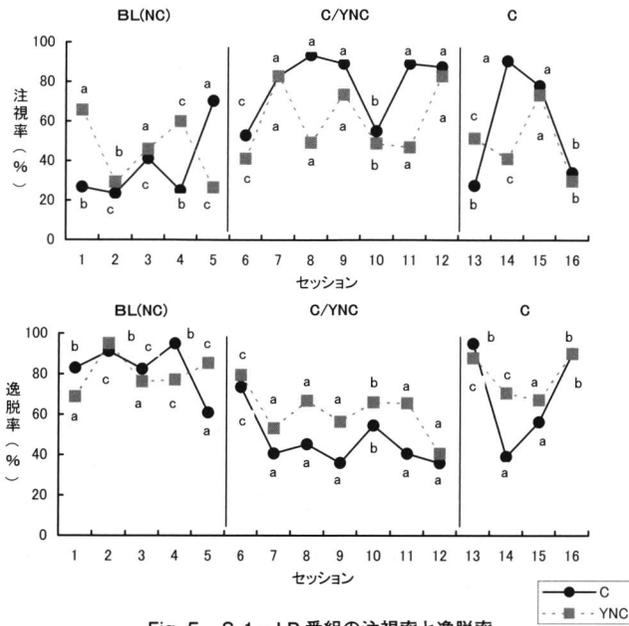


Fig. 5 S1・LP番組の注視率と逸脱率

* aはドラ, bはサザエ, Cはものまねの番組内容を示した。
 * 注視率の結果を上, 逸脱率の結果を下に示した。

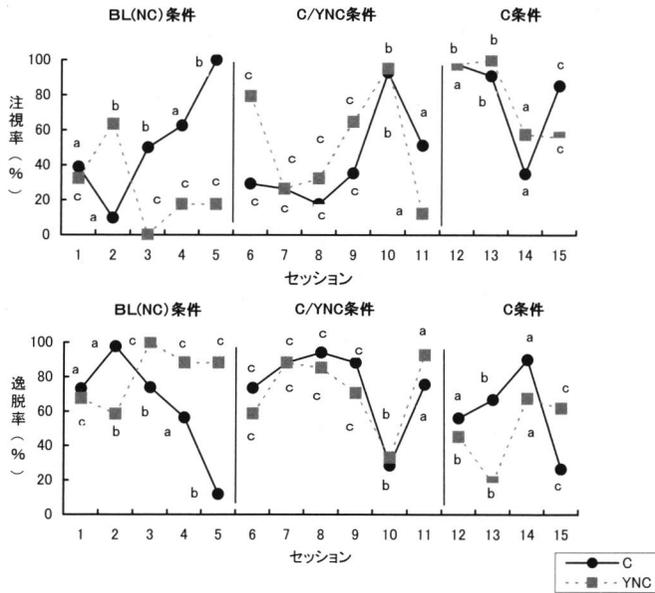


Fig. 6 S2・LP番組の注視率・逸脱率

* aはサザエ, bはうさぎ, Cはものまねの番組内容を示した。
 * 注視率の結果を上, 逸脱率の結果を下に示した。

HP 番組では、いずれも注視率は高く逸脱率は低かったために、選択結果と注視率及び逸脱率との関連は見出せなかった。LP 番組では、ものまねが最も多く選択されたにもかかわらず、注視率は低く、逸脱率は高かった。注視率が顕著に高く、逸脱率は低かったうさぎは3回しか選択されなかった。

4. 好みの事後査定

1) S1: II. 方法の3. 好みの査定で挙げた Fig. 1 の上のグラフより、HP 番組のトムでは実験前よりも注視率は低く、逸脱率は高かった。LP 番組のドラえもんでは、実験前よりも注視率は高く、逸脱率は低かった。

2) S2: Fig. 2 より、HP 番組では、注視率と逸脱率は大きく変化しなかった。LP 番組では、3つの番組とも、注視率は実験前よりも高く、逸脱率は低かった。

IV. 考 察

S1 の HP 課題事態では、フェイズ2において、Cセッションで YNCセッションよりも注視率が高く、逸脱率が低い結果が部分的に認められたが、その傾向は全体で見ると明確なものではない。S2 の注視率と逸脱率は NC・C・YNC 条件で差は認められなかった。注視率は条件に関係なく、フェイズ1～3を通じて高かった。また、逸脱率はフェイズ2, 3でデータの変動は認められるが低いレベルであった。これらの結果は、HP 課題事態では、NC・C・YNC 条件で課題従事行動に差はないという仮説を支持すると考えられる。HP 課題事態では、NC・C・YNC 条件で課題従事行動に差はないという先行研究 (Lerman ら, 1997) の知見を支持するであろう。

LP 課題事態では、S1 と S2 の結果に大きな差が認められた。S1 では、フェイズ2において、Cセッションで YNCセッションよりも注視率のレベルは高く、逸脱率のレベルは低い傾向が認められた。しかし、フェイズ3では、すべてのセッションでC条件を実施したにもかかわらず、Cセッションの注視率はフェイズ2よりも低い値が認められ、YNCセッションの注視率はフェイズ2と同じレベルであった。また、フェイズ3の逸脱率は、Cセッション、YNCセッションともに、フェイズ2に比べて高いレベルであった。選択結果を見ると、選択結果の位置偏向は認められなかった。注視率・逸脱率との関連を見ると、多く選択された番組の注視率は高く逸脱率は低かった。これらの選択結果より、注視率と逸脱率がS1の番組に対する好みを反映したとすれば、S1は好みにもとづいて選択していたと考えられる。S1はフェイズ2の YNCセッションで、選択できないが好みの番組に従事できたと考えられる。YNC条件で好みの番組に従事できていたにもかかわらず、C条件で YNC条件よりも課題従事行動が高まらなかった結果は、選択行為それ自体が課題従事行動を高めるとする先行研究の知見と一致しない (Dunlap ら, 1994; Moes, 1998; 村中ら, 2001)。

S2 の LP 課題事態では、NC・C・YNC 条件で注視率と逸脱率の差は認められなかった。選択結果を見ると、中央もしくは左に提示されたテープを取るか、触るという位置偏向が認められた。注視率・逸脱率との関連を見ると、最も多く選択されたものまねの注視率は低く逸脱率は高かった。これらの選択結果より、S2のテープを取る、触る反応は、好みにもとづいた選択行動ではなかったのではないかと考えられる。Moes (1998) は、C条件で課題従事行動

が高まる理由について、「対象児は、選択機会が強化の源となる可能性の高い好みの活動や物品に対して即時に従事できる手だてであることを認識していたからであろう」と指摘した。この指摘にもとづけば、C条件で課題従事行動が高まるためには、C条件で対象児が好みの高い番組に従事できることが必要である。S2のテープを取る、触る反応が好みにもとづく選択行動でなかったのであれば、選択機会が好みの番組に従事できる手だてには成り得ず、結果として、C条件で課題従事行動が高まらなかったのではないかと考えられる。S2では、好みにもとづく選択行動の生起を確認した上でC条件を導入する手続きが必要であったのかもしれない。

以上のことから、両対象児のLP課題事態の結果は、LP課題事態において選択行為それ自体の要因が作用し、C条件でNC・YNC条件よりも課題従事行動は高まるであろうという仮説を支持しない。

両対象児を通じて、共通して認められた傾向もあった。注視率と逸脱率のレベルが、NC、C、YNC条件よりも、視聴した番組内容に左右されていた点である。S1のHP番組であったノンタンやLP番組であったドラえもん、S2のLP番組であったうさぎでは、NC・C・YNC条件にかかわらず、注視率は他の番組に比べて高く逸脱率は低かった。

今後の課題として、HP及びLP番組の好みの変化を統制する手続きの検討が挙げられる。S1のLP番組であったドラえもんでは、実験期間を通じて注視率は上昇し、逸脱率は低下する傾向が認められた。S2においても、同様の傾向が認められた。これらは番組に対する従事体験の反復によって好みが高まった結果と考えられる。本実験では、好みの査定を含めると約8ヶ月の期間を要し、Dunlapら(1994)やVaughn & Horner(1997)の研究と比べると長期間であった。実験期間の短縮や好みの査定を頻繁に行う(Kennedy & Harding,1993)などの手続きが必要であった。

以上、本研究では、HP課題事態では、NC・C・YNC条件で課題従事行動の差はないという仮説は支持されたと考えられるが、LP課題事態では、対象児2名の結果に差が認められ、好みにもとづいて選択したと推測されるS1においても、選択行為それ自体が作用し、C条件でNC・YNC条件よりも課題従事行動を高めるといふ仮説が支持されなかった。両対象児ともに、注視率と逸脱率は、番組の好みによって左右される傾向が認められた。

好みにもとづく番組の選択を行っていたと考えられるS1では、LP課題事態のフェイズ2において、C条件でYNC条件よりも課題従事行動は高いレベルであった。また、HP課題事態においても、部分的に、C条件でYUN条件よりも課題従事行動は高いレベルであった。これらの結果は、C条件で選択行為それ自体の効果が生じたことを示しているのかもしれない。本研究の仮説が全く否定されるものではないと考えられる。HP、LP課題事態ともに、条件と結果の差異に安定した結果が認められなかった要因も含めて今後の検討が必要である。

文 献

- Barlow & Hersen (1984) Single case experimental designs: Strategies for studying behavior change. 高木俊一郎・佐久間徹監訳 (1988) 一事例の実験デザイン：ケーススタディの基本と応用. 二瓶社.
- Bambara,L.M. & Koger,F (1996) Opportunities for daily choice making. Innovations. Washington,D.C., American Association on Mental Retardation to Practice Series.
- Bannerman,D.J.,Sheldon,J.B.,Sherman,J.A.,& Harchik,A.E. (1990) Balancing the right to habilitation with the right to personal liberties: The right of people with developmental disabilities to eat too many doughnuts and take a nap. *Journal of Applied Behavior Analysis*,23,79-89.
- Cole, C.L., Davenport, T.A., Bambara, L.M., & Ager, C.L. (1997) Effects of choice and task preference on the work performance of students with behavior problems. *Behavioral Disorders*, 22, 65-74.
- Cosden, M., Gannon, C., & Haring, T. G. (1995) Teacher-control versus student-control over choice of task and reinforcement for students with severe behavior problems. *Journal of Behavioral Education*, 5, 11-27.
- Dattilo, J.& Rusch, F.R. (1985) Effects of choice on leisure participation for persons with severe handicaps. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*, 10, 194-199.
- Dunlap, G., dePerczel, M., Clarke, S. Wilson, D., Wright, S., White, R., & Gomez, A. (1994) Choice making to promote adaptive behavior problems. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 27, 505-518.
- Dyer, K., Dunlap, G., & Winterling, V. (1990) Effects of choice making on the serious problem behaviors of students with severe handicaps. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 23, 515-524.
- Guess,D.,Benson,H.A. & Siegel,C. (1985) Concepts and issues related to choice-making and autonomy among persons with severe disabilities. *Journal of the Association for People with Severe Handicaps*,10, 79-86
- 岩本隆茂・川俣甲子夫 (1990) シングル・ケース研究法：新しい実験計画法とその応用. 勁草書房.
- Kennedy, C.H. & Harding, T.G. (1993) Teaching choice making during social interactions to students with profound multiple disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 26, 63-76.
- Kerney,C.A., Durand,V.M., & Mindell,J.A. (1995) It's not where but how you live.: Choice and adaptive/maladaptive behavior in person with severe handicaps. *Journal of Developmental and Physical Disabilities*, 7, 11-24.
- Koegel, R.L., Dyer, D., & Bell, L.K. (1987) The influence of child preferred activities on autistic children's social behavior. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 20, 243-252.
- Lancioni,G.E.,O'Relly,M.F., & Emeson,E. (1996) A review of choice research with people with severe and profound developmental disabilities. *Research in Developmental*

- Disabilities, 17, 391-411.
- Lerman, D.C., Iwata, B.A., Rainville, B., Adelin, J.D., Crosland, K., & Kogen, J. (1997) Effects of reinforcement choice on task responding individuals with developmental disabilities. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 30, 411-422.
- Moes, D.R. (1998) Integrating choice-making opportunities within teacher-assigned academic tasks to facilitate the performance of children with autism. *Journal of The Association for Persons with Severe Handicaps*, 23, 319-328.
- Morrison, K. & Rosales-Ruiz, J. (1997) The effect of object preferences on task performance and stereotypy in a child with autism. *Research in Developmental Disabilities*, 18, 127-137.
- 望月昭・野崎和子 (2001) : 障害と言語行動 : 徹底的行動主義と福祉. 日本行動分析学会 (編) ことばと行動 : 言語の基礎から臨床まで. プレーン出版, 213-235.
- 村中智彦・藤原義博 (2005) 家庭における知的障害者の選択決定の機会についての検討. 発達障害研究, 27, 46-62.
- 村中智彦・藤原義博 (2003) 知的障害児における課題従事順序の選択が課題従事行動に及ぼす効果. 上越教育大学研究紀要, 23, 115-127.
- 村中智彦 (2002) 知的障害者における選択機会の効果に関わる文献的考察. 上越教育大学研究紀要, 22, 59-73.
- 村中智彦・藤原義博・小林貞子 (2001) 一自閉症児における課題の選択が課題従事行動に与える効果. 教育実践学論集, 2, 1-10.
- Parsons, M.B., Reid, D.H., Reynolds, J., & Bumgarner, M. (1990) Effects of chosen versus assigned jobs on the work performance of persons with severe handicaps. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 23, 2 53-258.
- Sigafoos, J. (1998) Choice making and personal selection strategies. Luiselli, J. & Cameron, M. (Ed) : Antecedent control. Baltimore: Paul H. Brookes. 187-221.
- Vaughn, B. & Horner, R.H. (1997) Identifying instructional tasks that occasion problem behaviors and assessing the effects of student versus teacher choice among these tasks. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 30, 299-312.

Effects of Choice-Making on Task Engagement Behavior in Children with Intellectual Disabilities :Examination of Task Preference Level

Tomohiko MURANAKA * and Yoshihiro FUJIWARA **

ABSTRACT

We examined experimentally the relation between effects of choice-making on task engagement behavior and task preference level in two children with intellectual disabilities. Before the experiment, three higher (lower) preference tasks were identified for each participant via preference assessments. Tasks were employed while watching a television program. The experiment consisted of three phases using alternative treatment design in each situation in which participants engaged in a higher (lower) preference task. In the first phase, the experimenter chose a task (no-choice conditions). In the second phase, choice and yoked-no-choice conditions were implemented. During choice sessions, participant was allowed to choose a task. During yoked-no-choice sessions, the experimenter chose the same task chosen by the participant in the immediately preceding choice sessions. In the third phase, choice conditions were implemented. As a result, two participants exhibited similar rates of task engagement across three phases in a higher preference task situation. For one of two participants, rates of task engagement were higher when the participant (rather than the experimenter) choose a lower preference task in part of the second phase. The rates of task engagement were more controlled than the choice conditions by the task preference level.

* Demonstration and Reserch Center for the Handicapped

** Division of Special Education